第三部　回顧録編

福井農林高校に寄せる甚句

昭和三〇年林科卒業　田邉　甚兵衛

ハアー福井農林高校を　甚句で紹介すればョー
ハアードスコイ　ドスコイ
ハアー菊花も香るこの佳き日　誉れも高き我が母校
　歳月重ねて一二〇周年　集いて祝う大祭典

仰げば尊し我が師の恩　心に刻みしあの日のロマン
友と語らう懐かしさ
春や花咲く菜園や　田植えで賑わう早苗歌
大志に燃える若人の　汗の結晶夏の市
花や野菜や果実類　明日への夢を膨らまし
精出す姿やさわやかさ

小鳥さえずり　蝶の舞　緑豊かな六呂師で
心身鍛える演習林　時は流れど変わらぬ大樹
大地に根ざし聳え立つ
秋は黄金の山となり　豊作祝う農文祭
人の輪広げる親子連れ

ハアー打てや響けや福農太鼓
　世界に輝く手さばきに　国際色豊かな夢乗せて
　益々繁栄目指します
　本日ご参集の皆様方へ　更なるご支援ョー
アアー願いまするぞえ
ハアードスコイ　ドスコイ

平成二五年一一月吉日

一二〇周年記念に臨み当時を偲んだ農林高校での生活風情を歌にしてみました。

高校時代の想い出とその後

昭和三二年卒業　**野路　武夫**

私が進明中学三年の時、第五回県民体育大会体操競技中学の部で、総合・徒手体操・鉄棒の部の優勝を果たしたこともあって、高校は体操部のあった高志高校か乾徳高校（現在の福商）に進学を希望したのであったが家庭の事情もあり、福井農林高校を受験することとなった。

入学すると、各体育系クラブの募集貼紙があったが、私のやりたい運動部、特に体操部はなかったので、野球部に入部することを内々決めていたが、バスケットボール部の貼紙がたまたま目に留まり、バスケットボール部に入部することにした。

入部して間もなく、当時の体育の白川滝之助先生から、体操部を創るので入るよう勧誘を受け、心が動き、バスケットボールをしながら体操部に心を奪われることとなった。

それを見抜かれたのか、バスケット部キャプテンの高嶋一雄さんから、お説教を受けることとなる。約四時間の話の中で「野路は体操が上手なので体操部に入りたいだろう。しかし、君の神経質な性格は、このままチームプレーであるバスケを続けた方がよいのではないか。そして、君を一年からレギュラーとして使いたいので、このまま頑張れ」などと悟された。

ここから、私のバスケ人生が本格的に始まることになる。進明中学時代も朝早くから、鉄棒にぶら下がった経験もあるので、朝早くから一人で体育館にてバスケットボールを手に取り練習を行った。時々ホームルームの出欠チェックに遅れたため遅刻扱いを受けたこともあった。一年生の時に新任の大島哲夫先生が、バスケの顧問となり棗中学校や福井農林で合宿を行った想い出もある。

私が三年生になった途端、クラブ活動がバスケ、女子バレー、相撲等の重点クラブと他の普通クラブに分けられ、当時の赤澤虎太校長に抗議を申し入れたことがあった。生徒会総会では、普通クラブバレー部の中垣内一夫君（身長一八六㎝）がバスケ部に入部するということが議題となり、キャプテンの私にも意見を求められたが、「本人中垣内君が決めることである」と申し上げたところ中垣内君は「バスケをやりたい」とはっきり宣言し、後の福農バスケが強くなる要素の一つともなった。

春季大会（インターハイ予選）において、決勝までいったがあと一歩で負けてしまい、優勝できなかった悔しさが私をバスケット漬けにしてしまった。卒業してからも、バスケットボールをしたくて当時の林孜先生に相談すると一〇数年前、当時の国体出場の卒業名簿を教えていただき、その名簿を基に、先輩方にも連絡し、毎週土曜日午後に練習することにした。クラブの名称は福井農林高校機関紙「蒼林」からとり「蒼林クラブ」として、福井県バスケットボール協会に登録した。翌年後輩が入部したこともあって、福井県選手大会にて優勝することが出来、翌年の第一三回富山国体に五名が出場することとなった。

一回戦は勝利したもの二回戦は優勝した鉄工社（東京）と当り完敗。四年後に岡山県にて第一七回国体が開催され蒼林クラブから二名がオール福井のメンバーに選ばれ、私がそのキャプテンを務めることとなるが、二回戦で又も優勝した秋田いすず（秋田）と対戦、完敗であった。

これまでバスケットとの出会いの中で負けた時の悔しさが、私自信を励まし、ここまで成果を上げることが出来たと思わずにはいられない。

翻って高校二年の時、開校六〇周年記念式典が行われたがこの時、

校門のところに六重の輪を作ったのが私達であった。何故か二年生の私がその責任者となり、これの作成に没頭したことも想い出の一つであり、六〇周年を体験して一二〇周年を迎えられることに不思議な縁を覚えると共に感慨深いものがある。

卒業後も関係皆様のご支援とご指導により活動できたことに深く感謝申し上げます。今後は、地域の発展のため、微力を尽くしたいと考えております。

学校や恩師の思い出

昭和三二年卒業　峰吉　勝博

昭和二九年四月、私達は福井農林高校第四回生として入学した。

しかし、昭和二八年四月に、高志高校から分離独立してから数えると実質的には、第二回生の入学生となる。

学校施設は、福井震災で難を逃れた木造二階建の校舎が一棟あり、その傷跡を残すかのように、太いスジカイ等で補強がなされてあった。

私達新入生は、この木造校舎に入ったが、本館（地震後に建てられたもの）からの渡り廊下は、雨が降る度に水びたしとなった。

学校行事も、独立記念田植上蔟祭や、独立記念マラソン大会とか、やたら独立記念の名の元の行事が続いていた。

学校備品等にも、高志高校の名が書かれていたり、マスコミ等でも私達のことを高志高校生と誤って報道したこともあり、高志高校からの分離独立がどんな性格のものかも良く理解出来ないまま、これらの行事に参加していた。

一年生の三学期頃にようやく校歌が制定された。早速全校生が小さな講堂に集まって練習が繰返された。その年の一一月に至り正式に校歌が発表され、以後、行事等があると必ず校歌合唱があり、独立福井農林高校の意識高揚が図られた。

こんな中にあって、ホームルームの時間は、各クラス共担任の先生から独立校としての自立・自覚にかかる訓示なるものを繰り返し聞かされた。

スポーツの対外試合出場も、部活のクラブ数が少なかったこともあり、限られた種目のみにエントリーする結果となり、みじめで淋しい思いをすることもあった。

しかし、これらの苦しい経験が私達の気持を奮起させ、農業クラブ活動やスポーツ活動に徐々に力を付け少なからず県下に「福農あり」をアピールすることが出来たと思っている。

こんな時代だっただけに担任の先生方のご苦労は大変なものであったと、今更ながら振り返っているところである。

福農高四回卒の私達を支えて下さった担任の先生方の思い出や、エピソードを追記し、改めて感謝の気持を捧げたいと思います。

寄稿は各クラスの有志にお願いした。

佐藤礼三先生

農業科　坪田　庄治

佐藤先生には失礼で直接は言わなかったが、私達クラスメートの間では、先生のことを「佐藤さん」と呼んでいた。親しみを感じ、何でも相談に乗って下さった。生物と畜産の教科担任であったが、授業もユニークだった。

毎年秋に行なわれる収穫祭には「豚汁」を作るため、畜産実習で飼育した豚を一匹生けにえにすることとしていた。三年農科生が実習の一環でメスを入れることが慣習であるが、私達の実習では、皆ビビっ

てそのメスを握ろうとする者がいなかった。
当時、クラスメートに相撲部だった冨坂君がいたが、佐藤先生は、例のユニークな話術で「相撲部の冨坂君やってくれ」と云って、冨坂君をヒーローに祭上げ、皆から拍手喝采となったことは忘れられない思い出だ。

野尻憲治先生　　林業科　三崎　裕二

福農ＯＢの野尻先生には一年二学期から卒業まで担任をしていただいた。
物事をズバリ解決することに猛け、クラス内での決めごとも先生が同席されると早く結論が出た。卒業後の進路決定も先生のアドバイスで、他のクラスより早かったようである。化学の先生だったせいか、いつも白衣を着ておられたのが印象的だった。
忘れられない先生のエピソードがある。自ら授業をしながら指先でチョークの一本を二ツ折り、三ツ折りしたのかと思うと、その一ツが誰かを目がけて飛んで来る。居ねむりをしたり、横見をしているとその的になる。
先生の指先ご注意が合言葉だった。

初岡春嶺先生　　土木科　川井　三郎

自坊で住職を兼ねておられる先生は国語担当であり、時折り古典を論じたりされた。
授業が始まると、教材とチョークの箱を手の平の上に乗せ、やや首をかしげた格好で廊下を歩き教室に入って来られる。今想うとその様子は、さすがに仏門に入られた方、という印象が強い。
物静かな半面、何故か厳しさは半端ではなかった。指導部から指摘された事項があったが、クラス全体の問題だとして大声で叱るわけでなく延々と訓話（説教）された。
それには理論があり、一同脱帽の始末だった。三年間持上りの担任だったためか、個別指導も積極的だったと記憶している。

小坂かず江先生　　家庭科　薮美　勇子

遠慮しがちな話し方をされ、常に優しさを前面に出された先生で私達のお母さん的存在だった。時々、休み時間や放課後に私達の輪の中に入り、編物や縫物を一緒にしていただいた。師弟の垣根を越えたお付き合いは近年まで続き、数人で先生を訪ねたりしていた。感性を表に出されないことから私達クラスメートは先生に叱られた思いはない。
ある時、体育祭の出し物をどうするかの話し合いがあったが、私達は余り積極的でなかった。しかし、小坂先生から、学校生活の思い出になるから何か作り物をしようと悟され、放課後数日かけて汗を流したことがあった。先生も毎日一緒になって作業して下さったことは忘れられない思い出の一つである。

私とバレーボール

昭和四四年卒業　**宮本　やす子**

私とバレーボールとの出会いは中学校に入学してすぐでした。その時の練習相手が福井農林高校や一般女子の県庁のチームでした。そして高校を指導していた白川先生と出会いがあり、福井農林高校にお世話になるようになりました。三年生の時に福井国体があるという事で身長の高い選手は強化校の方へ集り、私達チビ組は多田先生（中学時

代の恩師）白川先生の美山・福井農林ルートで国体を目ざして走り始めました。部員の半数は寮生活をし、朝の早くからサーブ練習。放課後は今とちがって外での練習で手には石がささったり砂とほこりにまみれ、顔は黒光りをしていました。そんな中、みんな歯だけが白く輝いていたのが印象的でした。外が暗くなると再び体育館での練習。うまくいかないとたたかれ、しかられ、ただがむしゃらにボールを追っていた記憶がよみがえってきます。土曜日の昼頃には汽車に乗って大阪の名門校に練習試合に行きました。夏休みに入ると日紡貝塚、東洋坊守口、日清紡岡崎と言った会社にお世話になり、そこに集って来る全国の強豪チームとの合宿の毎日でした。

そんなかいがあり、強化校を破りインターハイと国体の福井県の代表となり、インターハイ三位、国体三位と言う成績を残す事が出来ました。

今になって思うと、バレーボールは私にとって、厳しくて辛いものでしたが、勝利の喜びもたくさんありました。そして何よりもバレーボールを通し、たくさんの全国の仲間達と出会えた事が私の貴重な財産だと思っています。

福井農林高校の思い出

昭和四七年卒業　**青山　多実雄**

創立一二〇周年おめでとうございます。私が卒業して二年後に八〇周年がありました。あれから四〇年が過ぎているかと思うと、時間の速さを感じるとともに歴史と伝統ある母校を誇りに思います。

私は、中学校から部活は軟式野球をしていました。それで本校に入学して硬式野球に入部しました。入学に際してのカリキュラム説明会でビックリしたのは、部の年間予算が一五、〇〇〇円だったことです。中学校では予算が一二万円だったので、間違いで無いのかと思いました。

当時運動部で活躍していたのは、女子バレーボール部、男子陸上部（駅伝）だったと記憶しています。我部の監督は米谷先生で優しく温厚でしたが、勝負に対しては拘らなかったように記憶しています。一番印象深い言葉は、「勝っても驕らず、負けても悲観するな」卒業後の人生に於いても大切な一言でした。

私のポジションは、軟式は三塁手と投手（二番手）でしたが、硬式では運良く、二年生に投手がいなかったため、一年の秋からレギュラーとして出ていました。三年間の大会では一度も決勝には進めませんでしたが、先輩、同輩、後輩仲間と頑張れた事が大切な思い出です。しかし、社会人で全国大会（軟式）で準優勝できたのは、福農での部活のおかげだと感謝しています。

前後いたしますが、担任は一年滝波悲智郎先生、二年三年は、後に校長先生になられた山内雅夫先生でした。

高校時代の出来事では、二年生時には万国博覧会が大阪で開催され、遠足で見学に行った事が良い思い出です。私達二年生は、この年は修学旅行が二回もあったような気分になったものです。

生徒会においては、当時廃帽が論議され実施されました。人の取りまとめ方や、女性との接し方、難しさ等人生の勉強をさせていただきました。

実習は、農家の延長なので、あまり苦痛では無かったよう思います。楽しかったのは、当番で食べた梨、葡萄、苺等の美味しさで、今でも一番だと思っています。

卒業後四二年が経過し、同窓会はしていますが参加者は年々少なく

なってちょっと寂しい限りです。

さて、私は現在農業生産組織で集落営農を実施しています。これも当校で学んだものが基礎になり仲間と頑張っています。地域、集落の農を守るのは私達の一生の仕事であります。損得も大切ですが、他では得られない達成感が有る様に思えます。

最後になりましたが、記念事業及び史編集委員の皆様には大変ご苦労様ですが、宜しくお願いいたし、重ねて同校の今後の益々の発展をお祈り申し上げます。

また、今後も母校の為に微力ですがお手伝い出来たらと思っております。

福井農林高校の思い出

教諭（平成元、一〇～二二年）　小竹　正仁

私と福井農林高校との関わりは平成元年の勝山南高校との一年間の兼務に始まりました。週に三日の授業だけの勤務でしたが、職員室では多くの先生と仲良くさせていただき、いつも話ばかりしていたのを覚えています。その頃の私は勝山南高校で陸上部の顧問をし、個人的にも時々試合に出ていたこともあり、一度だけ陸上部の練習を指導する機会がありました。当時は盲学校のグランドか農道で練習していたので農道での練習方法を指導しました。あまりいい指導はできませんでしたが生徒達が真剣に聞いてくれていたのを覚えています。その後の新人大会で部長の吉村君が四〇〇ｍで予選を通過したときはうれしかった記憶があります。また体育祭では私が総力リレーで職員チームを作ろうと言い出し、ほとんどすべての先生が走りました。年配の先生や女性の先生は五〇ｍと短くしたせいで私と田畑輝彦先生と事務の山内良治君の三人が一〇〇ｍを二度走ることになり、閉会式では三人とも青い顔をしてテント裏で倒れていました。この時から私と福井農林高校とは走ることで繋がっていたのかもしれません。

この年で科学技術高校に転任し、自転車競技に関わることになり陸上と離れましたが、平成一〇年に福井農林高校に戻り、再び陸上に関わることになりました。当時はすっかり陸上のことなど忘れ、自分が陸上をしていたことすら思い出さない有様でしたが、私の中学時代の恩師でもある指導部長の東川伸一先生から陸上部を担当してくれと言われ、いやいや引き受けました。東川先生に「ゼロからの出発だがよろしく」と言われた直後に廊下で水崎校長から「陸上はゼロからの出発だけど頑張って」と同じことを言われ目の前が真っ暗になった覚えがあります。部員は三年三名、二年生二名、一年生一名の六人いましたが、しばらく活動をしていなかったようで部室は蜘蛛の巣が張っていました。すぐに三年生は引退し三名になりグランドの片隅で細々と練習することにしました。時々練習の途中で実習の生徒がもらってきた梨をむいて食べたり、ロードに行ったついでに買って来た鯛焼きを食べたりすることもあるほどのんびりとした練習でした。二年目は一度に一一名の一年生が入部し、私はかなりやる気になりましたが気持ちが空回りし、すぐに一年部員達が来なくなりました。ほとんど毎日が開店休業の状態だったので、誰も来ないグランドの草刈りと除草剤の散布をしていました。結局部員は半分ほどになりました。三年目はさらに六名の新入部員が入部し、やっと陸上部も活気が出てきました。一年間の私の頑張りでグランドの草もかなりなくなり走りやすくなったのも虚しく、改修工事にはいり盲学校のグランドをお借りして練習することになりましたが、秋に四名が北信越新人大会に出場できたと

きは本当にうれしかったのを覚えています。そして四年目、生徒に切望され大型免許を取り、初めて合宿をしました。生徒達もよほど楽しみだったのか、バスには練習道具以外に自転車とエレキギターまで積んでいました。説教し、自転車だけはおろしましたが旅館ではプレステーションが登場しました。ただ練習はかなりハードな練習（例えば全員五分間隔で二〇〇ｍを二〇本など）をしていました。それでも夜にはゲームで盛り上がるほどタフな生徒達に育っていました。この年から大会で優勝する生徒も出て来るようになり、平成一六年に村尾裕紀君がインターハイに出場し、大学進学後も日本学生で四位で入賞したときはよく頑張ったなとしみじみ思いました。思い出を書き出せばきりがないくらいたくさんあります。在任中の一二年間は朝から晩まで陸上ばかりで多くの先生方には随分迷惑をかけたと思います。

今では毎年二回、ともに頑張ってきた生徒達と集まって酒を飲み、思い出話などに花を咲かせています。福井農林高校での生活は本当に充実していたと思います。ここまで私を頑張らせてくれた生徒達、一緒に福井農林の部活動を盛り上げようと励まし合った運動部の先生達、わがままを許してくれた先生達に感謝を忘れないで、これからも頑張って行かなければと思っています。

枝垂れ桜

教諭（平成一三～現在）　岡田　玉緒

平成一三年四月、私の二校目の赴任先は一〇〇年以上の伝統を誇る福井農林高校だった。あれから一二年が過ぎ福井農林高校での勤務は一三年目に突入した。今年は一年生の担任をしている。これまで一度インドネシア農業研修に引率として参加し、二度演習林実習を体験した。三回卒業生を送り出し、四回修学旅行に行かせていただいた。そして一三回の強歩大会、一三回の田植祭・合唱コンクール、一三回の体育祭、一三回の農文祭に休まず参加することができた。校務分掌では五年間生徒指導部に、うち三年間は生徒会を担当し、次の三年間は庶務部でグリーンメールを作り、さらに次の三年間は教務部で時間割を担当した。そして今は進路指導部二年目で就職担当をさせてもらっている。赴任当時、幼稚園児だった我が子も、今年高校二年生となった。月日の長さを感じると共に長年勤務させていただいていることに感謝したい。

この一三年の歴史の中で、部活動では郷土芸能部の顧問として韓国、台湾、インドと海外公演に行かせていただいた。二度の全国総文入賞と数回の太鼓コンテスト入賞を、また福井市文化奨励賞を頂くこともできた。平成一五年には全国総文福井大会で郷土芸能部門代表理事として全国大会の運営を経験することもできた。さらには部活動指導において教職員優秀指導者賞まで頂いた。この学校は私の教員としての成長の場そのものであった。

中でも生徒会担当は学校の多くの行事を運営、指導する業務であり、仕事がおもしろくて仕方がなかった。運営は先々に立案され、一つ行事が終わるや否や次の立案が待っており、一息入れる暇もなかった。

「去年とは新しく生徒が興味を持って取り組めるものを」、「もっとスマートな運営や組織づくりを」等、アイデアを出してより良いものへと変えていく事や生徒会を動かしていく事が楽しかった。生徒が充実した経験を得られるのであれば惜しまず動くことができた。傍らには当時指導部長の松下巧先生がいらした。いつも見ていて静かに道標を立ててくださるお陰で迷わず進むことができた。

またある時は、私のパソコンの画面には毎日グリーンメールが映し出されていた。原稿が入るとグリーンメールに記事を貼る。写真の位置と文章の収まりとを決定していくのはいつも修正ばかりで、一文字ずらすと行が全部変わってしまうので、自分が気に入るまで修正し、時間さえあればグリーンメールに手を入れていた。新聞作りのノウハウをネットで学び、様々なルールを知り、その楽しさにのめり込んでいった時期だった。この仕事は後の授業で世界史新聞を生徒に作らせるという実践にも結びついていった。

部活動ではついつい熱くなり過ぎたこともあった。一度目は全国総文福井大会総合開会式の本校郷土芸能部の出場に関わることで部会長に絡み泣き。二度目は全国総文徳島大会が台風の為審査中止となった時、全国の顧問会議で訴え泣き。どちらも山崎市兵衛先生が生き証人であり今でもからかわれる厄介な汚点である。生徒と正面で向き合っているためか、郷土芸能部が理不尽な目に遭ったりすると、どうにもやり場のない感情が溢れてしまう。もっと器を大きくすべきと反省してやまないところである。

私が最初に受け持ったクラスでは卒業の前日に記念植樹を行った。大きな問題を起こした学年であったこともあり、学校に迷惑をかけたことにしっかり頭を下げて卒業してもらいたかったので、記念樹には「枝垂れ桜」を選んだ。スコップが壊れてしまうほど土は硬かったが、男の子たちが代わる代わる土を掘り、当時の田島千利校長の立ち会いのもと植樹をした。あれから六年が経ち、記念樹は色濃い花弁をたくさんつけるようになった。毎年この花を見上げるのは私だけという贅沢な花見をさせてもらっている。福井農林に私が教員としていたという証の木でもある。多くの生徒を育てたあげた福井農林一二〇年の大地、教員としての私の成長の場ともなってきたこの大地に咲く思い出の「枝垂れ桜」、今私も深々と頭を下げてみたい。

高校野球の指導者として

平成六三年卒業　教諭（平成三～現在）　島田　克久

きっかけは至って単純。中学のチームメイトが推薦入学で福農野球部に入ったから。入学前、堕落した春休みを過ごす私に業を煮やした母が「本当に野球するの？」と問いかけた言葉が今も耳に残る。当時全盛の池田高校やＰＬ学園の激闘に心熱くなることは確かにあった。しかし、だからといって特別高校野球や甲子園に強い憧れを持っていた訳でも無かった。そんな私が福井農林高校野球部に入り、素晴らし

い指導者や尊敬できる先輩方、共に苦労した後輩達と出会えたことで高校野球の魅力に心を掴まれた。誰もが味わえる事のできない貴重な人生をこうして歩めているのも、高校時代があったからこそである。

特に二年間ご指導いただいた坂下先生には、高校野球指導者への道を開いていただいた。忘れもしない三年春の関西遠征最後の夜。ミーティングの最後に突然伝えられた先生の異動。動揺を隠せないまま私一人残され、「お前は大学に行け。教員として母校に戻れ。そして野球部を頼む。」という言葉を頂いた。

それから五年後。約束通り母校で監督としての第一歩を切ることができた。導いてくださった先生の御恩に報いなければ、との思いが先走る。高校野球のイロハも理解していない若僧が、唯々がむしゃらに厳しく部員を追い込んだ。心通わない一方的な指導では当然結果など出るはずもなく、特に接戦での弱さと大差での敗退が続いた。その間、先生は県高野連の理事長や会長を歴任され、球場でお会いする度に心苦しさで一杯だった。「改善すべきは我にあり…」答えは見つかっても修正できない自分に苛立つ。正直、方向性を見失い、使命感だけを支えに監督を続けていた時期もあった。

しかし、多くの時間を費やすことで人のつながりが広がり、全国各地の指導者から多くのことを学ぶことができた。中でも最も印象に残っているのは、一〇年前にお会いした当時松山商業の澤田監督だ。澤田先生は全国制覇七度を数える超名門校の監督だが、野球の技術以上に、世の中で役立つ愛される人間になるために必要なことを、野球を通じて指導されていた。部活動や練習といった言葉では言い表せない、まさに修行・修練の世界であり、高校野球の本質を見せていただいた。この頃から、高校野球の理念、強さだけを求めるのではなく野球を通じて人を育てることを強く意識しながら指導に当たるようになった。

現在は、多岐に渡る私の至らぬ部分を、坂下先生に補っていただきながら指導に当たっている。以前先生から、「お前は生徒に隙を見せないな」と言われた。その隙を自在にコントロールし、部員達ともっと心通わせる指導を目指したい。そうなることで、先生をはじめこれまでお世話になった多くの方々に恩返しできるような野球部になると信じている。

太鼓とともに

平成一六年卒業　坂下　なつき

福井農林高等学校に入学した日、郷土芸能同好会による和太鼓演奏がありました。

私が和太鼓の生演奏を観たのは、それが初めてでした。体中に伝わる大きな音、振動、和太鼓ってこんなに迫力があるんだなぁと、その時はただそのように感じただけでした。それが、部活動を選ぶにあたり、友達から郷土芸能同好会に入ろうと誘われ、別にやりたいこともなく、なんとなく入部してみることになりました。実際にバチを持って叩いてみると、大きな振動がバチ先から自分自身に伝わって腕が跳ね返されるような感覚で、思った以上に力がいることを知りました。リズムや曲を覚えみんなで一緒に演奏する、その楽しさがだんだん癖

になっていき、毎日毎日、帰りのＨＲが終わった途端に体育館まで走って直行するくらい太鼓にのめり込んでいきました。

一年生の夏に全国高等学校総合文化祭が福岡県で開催され、私たちも郷土芸能部門に出場しました。思い返せばあの頃は自分たちのレベルの低さを全く自覚しておらず、どこからそんな自信が湧いていたのかわかりませんが余裕綽綽で他校の演奏を観ていました。身の程知らずという言葉がぴったりだったと思います。

二年生になり、郷土芸能同好会がようやく「部」に昇格されることになりました。翌年には福井県で全国高等学校総合文化祭が開催されるため、ちゃんとした部活動として活動することを認められ、タイヤを太鼓代わりに叩くほど不足していた太鼓も買ってもらえ「全国大会で優勝！そして東京国立劇場で演奏する！」という目標を掲げ部員一丸となって猛練習が始まりました。一番の大きな変化は立派な指導者がついてくださったことです。ＯＴＡＩＫＯ座明神座長の上坂優先生という私たちには勿体無いくらいの素晴らしい先生がご指導してくださいました。大会で演奏する為の曲も書き下ろしてくださり、様々なことを教えてくださいました。自分たちが如何に未熟だったか、そして、まだまだ成長できるということを知り、目標へ近づく為にひたすら練習する日々が高校時代の全てといっても過言ではないくらいでした。

私はいつの間にか、部長という立場になっていました。部員をまとめる、練習などを取り仕切る苦労を痛感したものの、私の周りにはいい仲間、いい後輩たちが揃ってくれていたので、部長として不甲斐なさを感じた時も、部員一人一人がちゃんと前を向いて目標を見据えてくれていたおかげで、気持ちを改め進んでいくことができました。そして、一番苦労をかけ振り回してしまった顧問の岡田玉緒先生がずっと居てくださいました。休みの日も練習したい！という私たちの我が儘が先生の貴重なお休みを奪ってしまっていた…とようやく気づけたのは自分が社会人になってからのことでした。今思えば本当に大変だったと思います。岡田先生には感謝してもしきれないくらいの御恩がありました。岡田先生、上坂先生、支えてくださった先生方、家族の為にも絶対に優勝して東京へ行くんだ！と、何度も仲間同士で約束し合いました。結果は、優勝は逃したものの二位をとることができ無事に国立劇場での演奏も果たせました。

高校時代の部活動では本当にたくさんのことを学びました。努力すること、悩んでぶつかること、仲間の大切さ、支えてくださる人の有り難さ、福井農林郷土芸能部にいたからこそ知り得たものです。生きていく上で必要なことを学べた、その事を糧にして私はこれからも前を向いて生きていこうと思います。

海外に興味を持つきっかけ

平成一七年卒業　白崎　健悟

早いもので高校卒業から約九年が経とうとしています。嵐のように過ぎ去った高校生活三年間でしたが、最近の出来事のように様々なことが鮮明に思い出されます。高校生活の基盤が校内にある修明寮だったことも記憶が濃く鮮明に残っている理由かもしれません。毎日が非常に充実していて学校に行きたくないなんて一度も思ったことが無い高校生活でした。普段の実習、寮生活、学校行事、インドネシア農業研修、農業クラブ、リーダーシップ通信員・・・思い出は書ききれないほどたくさんありますが、その中でも私が海外に興味を持つきっかけとなったインドネシア農業研修のことについて書こうと思います。

私は高校二年生の冬に第六回インドネシア農業研修に参加しました。農業関係者と文化の交流を目的とした旅で、参加生徒一四名中男子はたったの三名でした。なぜ男子は海外に興味が薄いのだろうかと思ったことを今でも覚えています。引率の先生は当時教頭先生だった西田先生と郷土芸能部顧問の岡田先生でした。

内容は全然まとまっていませんが、記憶に残っている思い出を並べてみました。

・出発前にインドネシア語集のしおりを手作りしたこと。
・ジャカルタは思っていた以上に都会で、高層ビルが立ち並び東京と変わらないと思ったこと。
・昼食で「チキン」だと言っていたのに、食べ終わった後に「ハト」だと言われたけど、美味しければ何でもいいし、異国の食文化に全く抵抗が無いと悟ったこと。
・スーパーマリオに出てくるクッパの甲羅みたいな果物（ジャックフルーツ）が田舎町の露店でたくさん売られていて、今すぐバスを停めて見に行きたいと思ったこと。
・世界遺産のボロブドゥール寺院に見学に行ったとき、現地の幼い子供たちが参加生徒みんなに土産物の販売をしているのに、自分には売りに来る子が一人もおらず、自分は現地人として溶け込めると確信したこと。
・タンジュンサリ農業高校で熱烈な歓迎を受けて、交流会では生徒と一緒に岡田先生もとても楽しそうだったこと。
・青年海外協力隊の隊員の方々のお話がとても興味深く、自分は将来協力隊になるぞと思ったこと。
・出発前に注意点として「氷の入った飲み物は口にしないように！」と注意を受けていたのにもかかわらず、ホテルで出されたジュースを油断して飲んで体調を崩したこと。

などなど大変楽しい七日間でした。書き出すとどんどん記憶が蘇ってきてキリがありませんが、やはり私が一番記憶に残っているのはタンジュンサリ農業高校と現地の青果市場です。タンジュンサリ農業高校の農場や農村風景を見学させていただき、ひとくくりに「農業」といっても、気候や文化、生活が違うとこんなにも違うのだと衝撃を受けました。市場に行くと現地の人たちの食や文化も垣間見ることができ、私の興味はますます膨らんでいきました。

大学に進学してからも海外に目を向けていました。台湾の国立中興大学に短期留学して熱帯果樹や作物を学んだり、海外旅行に行ったときにはスケジュールに農村や市場見学を盛り込んだりと、インドネシア農業研修をきっかけとして「現地の人々の生活と農業が分かる場所」に行くようになりました。最初は、ただの興味関心からだったと思います。しかし、自分が見たものを何かに活かすことができないかと考えるようになりました。

あのインドネシア農業研修から約一〇年。私は地元の農業関連企業に就職し五年が経とうとしています。今年は友人の紹介で、福農のインドネシア農業研修のコーディネートを担当している田谷さんの「農園たや」を訪問しました。そこではインドネシア人が四名、研修生として働いています。全員タンジュンサリ農業高校の卒業生だということに驚きました。彼らと話をするとインドネシアを訪れたことが懐かしく思い出されます。

現在、海外とは無縁の仕事をしていますが、今まで自分が海外で見たこと感じたことは無駄にはなっていません。他の人にはない価値観で関心高く仕事を進められているのは、今までの経験がここでカタチを変えて活かせているからだと思うのです。私はインドネシア農業研

修に参加したことがきっかけで、どんなことにも好奇心旺盛になったと思います。高校生活で海外の文化に触れる機会は非常に少ないですが、福農にはそのチャンスがあります。これからもインドネシア農業研修事業が継続されることを願っています。

福井農林高校時代の回顧録

平成二一年卒業　荻原　龍太郎

今改めて思い出してみると、私の高校時代は有意義なものだったと振り返ることができます。私は高校時代に勉強、部活動、農業クラブ、大学受験などのさまざまな経験をすることができました。その中で特に印象に残っている思い出は、部活動と農業クラブの全国大会です。

私は高校三年間レスリング部に所属していました。レスリングはマイナーなスポーツで競技人口が少ないのですが、顧問の先生の熱心な勧誘を受けたことをきっかけにレスリングを始めました。レスリングの練習は想像していた以上につらいもので、特に県外へ遠征に行った時の練習は本当に死ぬかと思いました。また、レスリングは階級が分かれているので大体の人が減量をしなければなりません。減量中は練習による体への負担が大きく、授業中は起きているだけで精一杯の時もありました。減量が成功することでようやくスタートラインに立てるので、部員全員で声を掛け合いながら練習していたことが印象に残っています。みんなで協力しつらい練習を乗り越えたことで、私は二、三年生の時に団体でインターハイに出場することができました。インターハイではいい結果を残すことができませんでしたが、どちらのインターハイともこれからも忘れることはないと思います。

もう一つ印象に残っていることは農業クラブの全国大会です。私は二、三年生の時に農業鑑定競技の農業土木部門で農業クラブの全国大会に出場しました。二年生で初めて出場することが決まった時、先生に優秀賞を目指せと言われました。この言葉を聞いた時、専門知識が十分にない自分には絶対無理だと思いました。しかし、優秀賞を取ることが伝統だったので、自分がその伝統に傷をつけるわけにはいかないと思い必死に勉強しました。勉強を進めていくと、聞いたことのない専門用語や初めて見る数式が多く、分からないところはとにかく先生に聞きに回り、大会の出題範囲を全て勉強しました。その結果、無事優秀賞を取ることができました。この時は達成感より伝統を壊さずに済んだという安心感の方が大きかったと思います。三年生の時は最優秀賞を目指していたのですが、レスリングの大会と日程が近かったため十分に勉強することができず、最優秀賞をとれなかったことが悔やまれます。今振り返ってみると三年生の時は専門知識が身に付いていたので、なにかしら自分に甘かったのだと思います。

私は高校三年間を通して、さまざまな面で成長することができたと思います。その中で、無駄な努力はないということが分かりました。努力をしても目標を達成することができないかもしれませんが、少なくとも目標に近づくことができると思えるようになりました。だから私は今後もなにかと努力を続け、成長していきたいと思います。